

森鷗外『安井夫人』小考

——佐代のイメージ——

日 塔 美代子

はじめに

本論は、『青年』と、後の歴史小説とのモチーフのつながりに着目する視点から出発しており、『青年』から続く道を『安井夫人』の中に見出す試みである。具体的には、『青年』において考えられていた、「利己」「利他」の問題を『安井夫人』の中にみようとすることで、その過程で重要な要素となるのがメーテルリンクとの関係である。

メーテルリンクの鷗外への影響についてはすでに先行研究に多くの指摘があるが、メーテルリンクの評論、特に『蜜蜂の生活』の影響を、『安井夫人』という作品中に指摘することができないのではないかと考える。そこに見出されるイメージをもとに、従来多くの問題が提起されてきた佐代像の解明をはかってゆきたい。

*

*

*

『安井夫人』は、大正三年四月、「太陽」第二十巻第四号に発表された。「最も新しき意味に於ける歴史小説」（広告文）を標榜した作品集『意地』を大正二年六月に出版したのちのことである。『安井夫人』発表の後、歴史と自然について記した『歴史其俚と歴史離れ』と、『山椒大夫』が大正四年一月、時を同じくして発表された。

『安井夫人』の研究史においては、なんらかの形で鷗外の息軒への共感や、佐代への理想像の投影を読むという方向は共通しており、本作品

を読む上での基本的前提として見解の一致をみていると言えるだろう。

稲垣達郎氏は、『安井夫人』と『妄想』（『三田文学』明治四四・三、四）との関わりを考察するなかで、「佐代の生」に「鷗外のそれへの一脈のつながり」を見、次のように述べる。「お佐代さんにおいては、遠いところのものは、実はほかならぬ眼前の自己滅却の無償の道そのものである」、「自己滅却のかたちでありながら、ほんとうは自己への積極だったといえる」。作品としては、後の史伝に続く、「目的論を絶した醇乎たる世界」への容易ならぬ過程であって、また「歴史其俚」と「歴史離れ」が混交しているが、その均衡が取れていない作品であると評価した。

作品評価の大枠は稲垣氏によりほぼ決定付けられたが、以後の研究の方向・評価は様々である。『妄想』『サフラン』などの他作品との関連でとらえる論、佐代の女性像を「新しい女」との関連でとらえる論、「これを書くわたくし」が出現しての語りを問題視する論などがある。この多様さは、この作品を読み取ることのある困難さを示しているのだが、それはつまり、佐代像の見えにくさである。『安井夫人』という題名にも関わらず佐代についての記述は少なく、語り手の見解に寄りかかる形となり、読者は等身大の佐代の像を結ぶことが難しいのである。

一、「利己」と「利他」

佐代は、「夫に仕へて労苦を辞せなかつた。そして其報酬には何物をも要求しなかつた」と描かれる。語り手の紡ぎ出す佐代像は、読者に、その自己犠牲的精神を強く印象づける。先行研究にも多く指摘のある「献身」のモチーフを持つ作品であるが、このモチーフは、「利己・利他」という問題に深く関わっている。

木股知史氏は、〈個人主義〉という問題が、西欧では経済の問題として表れたのに対して、日本の近代では、まず利己か利他かという倫理的な問いとして現れたことを取り上げ、産業主義化する社会とそこで生きる個人の諸関係を律するモラルを求めてさまざまな形で行われた模索と、それが文学の場に持ち込まれた様相を明らかにしている。鷗外もその流れに位置づけられ、『青年』（『スバル』明治四三・三～四四・八）の「利他的個人主義」における「自我至上を自己放棄によって転換するという志向」に鷗外の肉声を読み取れるとする。また、パウルゼンの倫理学の学説への鷗外の言及^③について、「利他は自利の変化なり」としてすべての行為に「自利」を据えるパウルゼンに近接しながらも、〈「我」を棄てる〉というモチーフにより重きを置く鷗外の傾斜を指摘する。鷗外は、パウルゼンの学説の紹介に加える形で、利他的行為について「その捨てる所のもので実質の我にして、その護る所のもので理想の我なり」と述べているのである。利他的行為に付随する〈「我」を棄てる〉というモチーフは、『青年』における大村の「我というものを棄てることができるか」という言説にも表れており、以後の鷗外の作品を考える観点としても重要であると思われる。

また、清田文武氏は、鷗外のメーテルリンクやリルケへの関心の高さを指摘し、鷗外という磁場においてその受容に示される傾向、心的原則

を見出している。そのうちの一点である「献身」という問題について、次のように述べる。

急速に推移する時代にあつて、在来倫理・道徳に対し鷗外は注視を怠らなかつた風で、それは小倉時代以降の箴言集的諸文にも窺われるが、その中で献身・孝の問題が挙げられる。これには行為・行動の動因としての自利・利他を含んでいた。

清田氏は、鷗外の、それまでのモラルに代わるそれを模索する過程における「献身」・「孝」に「自利・利他」との関わりをみている。メーテルリンク『モンナ・ワンナ』の、犠牲的精神を持つヒロインに、リルケ『家常茶飯』の「因襲の外の関係」と契合する問題を見、「既存の倫理道徳への批判と新たな照射」を行ったとする。ここで、清田氏が、自利・利他を行為の「動因」としての問題ととらえている点に注意したい。鷗外における自利・利他の問題は、「どうあるべきか」という問題としてだけでなく、人間の行為の「動因」の問題としてとらえられるのである。

「献身」のモチーフが、様々な形をとって作品の登場人物に表れていることは、先行研究に多く指摘があるが^④、「利他」という問題追求のひとつのバリエーションとして、『安井夫人』における佐代像もまた形成されていると考えられる。佐代における「献身」のありようを、メーテルリンクとの関係を手がかりに考えてみたい。

二、メーテルリンク『蜜蜂の生活』

メーテルリンクの思想や、その日本への移入については菊田茂男氏^⑤

詳細な論がある。菊田氏は、メーテルリンクの思想を、三期に分けている。初期は、『マレーヌ姫』、『闖入者』、『群盲』などの戯曲に死と運命にまつわる暗い厭世的、神秘的宿命観がみられるとし、中期には『貧者の宝』、『智恵と運命』という感想評論集に、「智恵」により人間は不幸な運命を転じて幸福をかちとることができるという光明的楽天主義が表れているとする。後期は、『蜜蜂の生活』、『花の智性』をはじめとする感想評論集、『モンナ・ワンナ』、『青い鳥』、『マリ・マドレーヌ』、『スチルモンドの市長』などの戯曲に、中期の思想を深化させ、日常生活の中に積極的に幸福の所在を追求しようし、智恵の働きを限りなく信奉する理想主義的・向光的思想を読み取っている。

鷗外が初めてメーテルリンクにやや詳しく言及したのは、明治三十六年二月二十七日内田魯庵宛書簡（「MAETERLINCK」その後少々読み進み候そのMYSTIKは素人哲学たることを免れざるべしと雖も論文中の譬喩などいかにも観照的にして人にハツとおもはせるところあり感服と存候」）であると思われるが、一貫して強い関心を持ち続け、『マアテルリンクの脚本』（『心の花』明治三六・六）においてはメーテルリンクの「幸福を求める楽天論」を紹介している。メーテルリンクの鷗外への影響については、清田文武氏（前掲書）、金子幸代氏^⑧らにより深く解明されている。金子氏は、メーテルリンクと鷗外との関わりを女性像という観点から詳細に論究している。避けられない残酷な運命をも、「智恵」の力によって光明へと導いていく「明視」「明智」の人を描いた『モンナ・ワンナ』を鷗外が高く評価し、その影響が『安井夫人』に表れており、佐代は「日本のモンナ・ワンナ」たる「智恵」の光に照らし出された強い意志を持つ女性であるとした。戯曲や『貧者の宝』『智恵と運命』といった感想評論集との関わりは見逃せないが、本論では、さらに『蜜蜂の生活』に着目したい。

『蜜蜂の生活』には、二十年にわたる養蜂において彼が観察しえたことが、愛情に満ちた言葉で記されている。『貧者の宝』『智恵と運命』といった感想評論集に著された思想が、養蜂から多く着想されたであろうことが強く感じられ、その源泉、隠された秘密が明かされるような作品である。

この作品のなかでメーテルリンクは、「吾々が吾々の智と称するものは動物に於て本能と呼ぶものと同じ起源、同じ使命を持つて居る」^⑨といひ、我々人間は、自分が確信した行為を為し、その結果もわかったつもりでいるが、我々は蜜蜂がいると思っていると同じ程度に暗闇の中にと述べる。蜜蜂は自分が蜜を貪り食おうとする「動物慾」では説明できない利他的な行為をし、それは暗愚にも見えるが、人間の暗愚がこれと同様に無私の目的を持つている場合には人間はこれに他の名をつけるといふ。また、蜂や花などの、人間が「自然」と呼ぶ存在が為す「智恵ある行為の外観を凡て備へて居る行為」が「幸運な偶然を喚び起こしてこれを保持することを認めないわけには行かない」といふ。「智恵」により暗い運命を切り開くことができるということを述べるが、ここで彼が「智恵」を、人間だけが持つものとはもはや限定していないことが知られるのである。

なお、この後メーテルリンクは、この作品と合わせて昆虫三部作となる『蟻の生活』『白蟻の生活』を書くが、あとの二冊は鷗外死後の発表である。また、『蜜蜂の生活』のドイツ語版は他のメーテルリンクの著作とともに鷗外文庫に収められている。

上田敏は、岡本清逸訳『蜜蜂の生活』（大正二・九）の序において、昆虫学者アンリ・ファブルの「常に浅はかな科学万能論を唱へずに不可思議の奥にまた更に大なる不可思議のある事を説いてやまず、自分は観察する、説明はしないとまで断言してゐるくらいである」という姿勢に触

れつつ、「此書の著者なる白耳義思想家の意見も多分其辺に近いものであらう。蜜蜂の生活はこのやうだ。此知識が或は幾分か人間の生活にも益する所があるであらう。然し人間が是非蜜蜂のやうにしなければならぬとは決して言はないのである。かういふ用心をして、篤と此書を味へば興味津々として尽きず、造化の妙と美とを深く感じ得るであらうか。」と、その「造化の妙」を高く評価している。

この書に、次のような一節がある。養蜂の歴史において、遠心力を利用して蜜を採取する分離機ができ、「彼」(人間)が「彼等」(蜜蜂)の「それと知られない支配者」となったことについての部分である。

要するに、彼は其要求が彼等の道德法律と一致する限りは、彼等に自己の欲する所をなさせ、彼等からその要求する所のものを得るのである。それは彼等が余り大きくて見えず、余り差異が甚だしくして了解の出来ない自分を支配する思ひ掛けぬ神の凡ての意思を通して、彼等は其神自身も見ない遙か遠方を見て、厭かず犠牲を払つて其種族の神秘的な職責を果たすことをのみ心掛けて居るからである。^⑩

「吾々が蜜蜂を観る様に吾々を観て居る實在」を繰り返して想定し、人間が蜜蜂とどれほど異なるのかという問いを発し続けるメーテルリンクは、この蜜蜂の姿に人間を見ていた。ドイツ語の「Seele」(霊)の概念を中心に、身体としての外面と霊たる内面の関係、人間を動かす衝動、行為の動機に強い関心を持っていた鷗外^⑪が、人間と蜜蜂を真剣に同次元におき、無生物をふくめてこの世界を支配する「普遍的靈魂」を探ろうとするメーテルリンクの考え方に冷淡だったとは考えられない。この蜜蜂が見ている「遙か遠方」のイメージは、佐代が見ている「遠い遠いと

ころ」のイメージに通底するのではないか。

『安井夫人』における佐代は、金子幸代氏が指摘するように、メーテルリンクの思想を背景として造型されているといえるが、「明視する女性」としての女性像は、さらにその源として、メーテルリンクが愛した蜜蜂、特に「巢の精神」のもとに献身的に働く雌蜂の姿を重ねてイメージすることで、より明らかな像を結ぶのではないだろうか。我々をとらえているかのように思える神とも言うべき存在を、我々は知らない。それでも我々は蜜蜂のように自分が為すべきことを知っているはずだという確信を与えてくれるのが、佐代のような人物なのである。

この佐代のイメージには、鷗外が見出した、犠牲的精神を持つある種の間人間像が先行すると考えられる。『青年』における植長の安である。

北川伊男氏^⑫は、『青年』について、「個人主義思想に於ける利己主義と利他主義の問題、その間の飛躍を可能にする献身・犠牲という行為の問題は、女性描写によって愛の問題として把握され、そこに新しい芸術の形式が求められようとしている」とし、「義務心の強さうな、好んで何物をも犠牲にするやうな性格」と称された植長の安を、『仮面』(明治四二・四)における「みよ」と同型の女として重視する。植木屋佐吉の妻「みよ」は、「本能的人物」と書かれ、「家畜の群の貴婦人」に見られぬ「高尚な人物」と似たところがあるとされる。「みよ」のような「本能的人物」は、「学生」の結婚相手としては敬遠されるが、『青年』の安は、純一にその「自然の美」を気付かせる。安や「みよ」は、理想像としては描かれていないが、佐代への系譜を持ち、否定的イメージの、飼いなされた「家畜」に対して、肯定的な意味で「本能的」なイメージを持つ。このような「本能的」という語のイメージには、メーテルリンクの愛した蜜蜂のイメージを重ねることができらるだろう。

三、憑かれた魂

「本能的人物」の系譜にあり、メーテルリンクの愛した蜜蜂に重なることができる佐代像についてさらに他からも光を当てて考察を進めたい。

分銅惇作氏は、『安井夫人』を、リルケの影響という観点から詳細に論究している。鷗外が翻訳した『家常茶飯』、リルケの思想を紹介した『現代思想』をもとに、「リルケ的思考」をまとめると、次のようになるという。すなわち、「作中に根本テーマとして何度も出てくる〈因襲の外の関係〉と、「高度の宗教的でさえある〈犠牲・献身〉の概念」と、「通俗的な時間の意識を超えた〈生の永遠性〉の追求」である。

『家常茶飯』の〈犠牲・献身〉は因襲を超えた次元のものであり、いかにも淡々としてさりげなく見えるが、何物かにとり憑かれた魂の幽暗な様相であり、永遠を志向してやまない異様な輝きを帯びている。こうした思想傾向は後年の「マルテの手記」などで一層明確な形をとるが、レディ・メイドの生活を破って、生の根源的な深部の幽暗な名づけがたい物の姿を見つめているのがリルケ文学の本質である。

鷗外が共鳴したのはこのようなリルケの文学の本質であると氏は論じるが、「何物かにとり憑かれた魂」という表現は、鷗外の歴史小説の人物像にもつながる。ここで想起されるのが、『最後の一句』のいちや、『山椒大夫』の安寿にも、他者の視線により捕らえられた「憑く」という表現がなされていることである。「憑かれる」とは狂気に近いものもあり、また黙々と何かに励む様相を呈する場合もある。己を何かに没

入させた境地を示す言葉であるが、佐代の献身の様相は、「淡々としてさりげなく見える」ものとしての「憑かれた魂」の表現ではないだろうか。

鷗外が『安井夫人』において描いた佐代という人物は、「利他」という問題追求のひとつのバリエーションとしての〈「我」を棄てる〉ことができる人物であり、「憑かれた魂」を持つ「本能的人物」として、メーテルリンクの「蜜蜂」のイメージを重ねた存在として描かれているといえよう。

また、『蜜蜂の生活』において、通常は「節儉で謹直で先見の明ある賢い蜜蜂」が、駆り立てられるように分封（巢分け）行動に及ぶ様子は、「彼女が、何か避けることの出来ない一種の狂気か、機械的の衝動か種族の法則か、自然の法則か、流転する時間の中に隠れて、凡ての生物には見えないある力に服従するものと、長く信じられて居た」が、「それは盲目的な移住ではなく、熟慮の結果と見える将来の人々に対する現代の国民の犠牲である。」と述べられている。通常の淡々とした節儉な蜜蜂が、ときに「一種の狂気」か、「機械的の衝動」かと見える変化をす。これは捉え方によつては「熟慮の結果」の智恵ある行動ともとらえられる。このように、「憑かれた魂」の様相はメーテルリンクの描く蜜蜂の様相と通ずると考えられる。

その意味で、佐代の少女時代から結婚後の変化を表す比喻として、「繭を破つて出た蛾」という表現が使われているのは非常に示唆的である。

そしてこれまで只美しいとばかり云はれて、人形同様に思はれてゐたお佐代さんは、繭を破つて出た蛾のやうに、その控目な、内気な態度を脱却して、多勢の若い書生達の出入する家で、天晴地歩を占

めた夫人になりおぼせた。

「繭を破つて出た蛾」というのは無論変化の鮮やかさを示す比喻であるが、蜜蜂が蜜を人間に与えるように、繭を自分のためでなく吐き続ける蚕のイメージは、重なるように思われるし、「絹物を著ない」という表現とも照応する。また、蛹から蛾への変化は、自然や神というような不可知の存在が決めた摂理であり、その表出が劇的に見えるに過ぎない。佐代の結婚の申し出は、仲平の内面を見通す「智恵ある行為」と理解されるが、蜜蜂の分封行動のように周囲に突然の驚きを与えるものだったのである。繭と蛾の比喻にも、メーテルリンクの蜜蜂に重なる点を見出すことができる。

おわりに

メーテルリンクは、『蜜蜂の生活』において、人間が「地球上で他に類例のない性質を持った特殊の精力に変形する為に造られてゐる」ことは、蜜蜂が蜜を生産することが「其舌や口や胃に記されて居る」ように、我々人間の身体、神経系統にすべて記されていると述べている。そして、「思想、智、悟性、理性、霊、精神、脳力、徳、善、不義、智識などと呼ぶる、本来一つの精髓に過ぎないのに幾多の名を持つて居るこの不思議な流動体を生産する為に人間の様に造られて居るものは何もなからう。吾々のあるものは凡て此もの、為に犠牲になつて居る」、つまり、「思想、智、悟性、…」といった「蜜」に比される「流動体」を作るために我々は「犠牲」を捧げるのであるという。そして、あくまで未来に明るい兆しを確信しつつ、次のように述べる。

蜜蜂は其の集むる蜜を自ら食ふか怎かを知らない。吾々も同様に吾々が宇宙に紹介する精神的の力を誰が利用するかを知らないで置かう。蜜蜂が自分にも其子にも不要な余分な蜜を集めて花から花へと飛ぶ様に、吾々は此不可知の焰の養分となるものを残らず索つて真理から真理へと移り、吾々の有機的の義務を果たしたといふ確信を以つて、どんな事態が起つても差支のない様にして置かう。

メーテルリンクの考える「犠牲」とは、ただ「未来」としか言いようのないものに捧げられるものである。ここに、「未来」を見つめる佐代の像を重ねてみよう。

お佐代さんは必ずや未来に何物をか望んでゐたゞらう。そして瞑目するまで、美しい目の視線は遠い、遠い所に注がれてゐて、或は自分の死を不幸だと感ずる余裕をも有せなかつたのではあるまいか。其望の対象をば、或は何物ともしかと弁識してゐなかつたのではあるまいか。

佐代の生と死については、佐代は、「自分の死」を「不幸」だと感ずる「余裕」をも持たなかつたのではないかと述べられている。しかし、「自分の死」を「不幸」と仮に感じたとしても、それが、佐代の「生」の幸福を否定するものではない。むしろ、生が充実していればこそ「死」が不幸であるとも言えるわけである。

メーテルリンクは『智恵と運命』において、「運命を死及び災難とのみ連結して考えるのは不正である」「その人の全生涯を死の一刻で総計する権利を我々は有つて居るのであるか」と問うている。最後の「死」を以つて「生」が暗黒に塗りつぶされたように思うのは間違ひであると

考えていたのである。語り手もまた、佐代の生を、死の暗黒で塗りつぶすことを否定したととらえるべきである。

佐代は、蜜蜂が見るのと同じように、「未来」を見ていた。それが重要であり、作者が描き出したのはそのようなイメージを持った像であると言えよう。

『青年』において純一の思想の旅路を蜜蜂で喻えた鷗外は、メーテルリンクの思想の基底となる『蜜蜂の生活』を、イメージの源泉として持っており、「利他」の問題追求のひとつのバリエーションとして造型された佐代の「犠牲」の精神、「献身」は、このイメージの表れと考えられるのではないかと思う。

注

- ① 稲垣達郎氏「安井夫人ノート」(関西大学国文学 第四号 昭和二六・六〇)
- ② 木股知史氏「利己か利他か―明治文学と個人主義―」(「立命館文学」昭和六三・二三)
- ③ 『フリードリヒ・パウルゼン氏倫理説の梗概』(福岡県教育会々報 第十六号 明治三三・一一)
- ④ 清田文武氏「鷗外におけるメーテルリンク、リルケ、シュニッツラー」『鷗外文芸の研究 中年期篇 有精堂 平成三・二』
- ⑤ 例えば大島田人氏「鷗外の翻訳文学(五)―鷗外の女性観とリルケとの交渉を饒って―」明治大学教養論集(三三) 昭和四〇・三 は、翻訳小説を含む登場人物の「献身」を三つの類型に分けている。
- ⑥ 菊田茂男氏「メーテルリンク」(福田光治・剣持武彦・小玉晃一編『欧米作家と日本近代文学第三巻 ロシア・北欧・南欧篇』教育出版センター 昭和五一・一一)
- ⑦ なお、ここにあげられた作品の初出はそれぞれ『マレーヌ姫』(二八八九)、『闖入者』(二八九〇)、『群盲』(二八九〇)、『貧者の宝』(二八九六)、『智恵と運命』(二八九八)、『蜜蜂の生活』(一九〇二)、『花の智性』(一九〇二)

〇七)『モンナ・ワンナ』(一九〇二)、『青い鳥』(一九〇八)、『マリ・マドレーヌ』(一九一二)、『スチルモンドの市長』(一九一九)である。

⑧ 金子幸代氏「歴史小説のヒロイン・『安井夫人』」(『鷗外と女性』―森鷗外論究― 大東出版社 平成四・一一)

⑨ 岡本清逸訳・上田敏校閲『蜜蜂の生活』(大正二・九 東亜堂書局、本稿の『蜜蜂の生活』の邦訳の引用は、すべて本書による。なお、引用に際し、鷗尾浩訳『蜜蜂の生活』『メーテルリンク全集第二巻』大正一〇・四 冬夏社、山下和夫・橋本綱訳『蜜蜂の生活』(工作社 昭和五六・二)を参照した。

⑩ 山下和夫・橋本綱訳『蜜蜂の生活』(工作社 昭和五六・二)による該当部分の訳を参考に掲げる。

「ようするに、人間はのぞみどりのことをし、要求どりのものをえるわけである。ただしその要求が彼女たちのためにならず、その法になっていないときはそのかぎりではない。というのも、見分けるにはあまりに大きすぎ、理解するにはあまりになじみのうすい、想いがけない神が彼女たちをとらえているが、その神の意志を通じて彼女たちが見ている先は、神自身もおよびのつかない彼方であり、またゆるぎない自己犠牲をはらいながら彼女たちが成しとげようとしていることは、彼女たち自身の種族の神秘的な務めのほかにないからである。」

⑪ 清田文武氏「鷗外の文芸観と「霊」Seelへの関心」『鷗外文芸の研究 中年期篇 有精堂 平成三・二』

⑫ 北川伊男氏「鷗外の『青年』に於ける思想と芸術」(「皇学館大学紀要」昭和四二・二)

⑬ 分銅惇作氏「安井夫人(近代小説鑑賞・三)」(「言語と文芸」昭和三七・七)

⑭ 出原隆俊氏は、鷗外が多用する表現を探索することで、見落とされてきた登場人物の動作の意味や内面を照らし出そうとする。その中で「何かを契機として変貌を遂げ、他者からは理解しがたいものを抱え込んだ存在」に用いられる「憑く」という表現にも着目している。(『鷗外が多化する表現について―『山椒太夫』を中心に―』講座森鷗外2 森鷗外の作品(新曜社 平成九・五)

⑮ 繭や蛾のイメージについては、次のような指摘もある。布村弘氏は、『西青散記』の雙卿と『安井夫人』佐代に共通点を見出し、「雙卿が「繭薄ケレバ誰カ病後ノ蠶ヲ憐マン」と、繭や蝶に喩えられること多く、「井白炊蒸」は勿論、稲を束ね、草を運ぶ間にも、田に働く夫や姑のために、「饅餉（弁当運び）」に精を出しているのは、そのまま、お佐代さんが結婚後「繭を破つて出た蛾」のように「形振に構はず働いて」いる姿と対応するとしている。（布村弘氏『西青散記』の雙卿と繭外後期作品の女性像）平川祐弘・平岡敏夫・竹森天雄編『講座森鷗外3 鷗外の知的空間』新曜社 平成九・六

⑯ 『智慧と運命』の邦訳は、大谷繞石訳『智慧と運命』（南北社 大正二・一二）による。引用に際し、鷲尾浩訳『智慧と運命』『マールリンク全集第一巻』大正九・一二、山崎剛訳『限りなき幸福へ』（平成一三・三 平河出版社）を参照した。

※繭外の作品の引用は、第三次岩波版『鷗外全集』（全三十八巻）による。ルビは省略し、旧字は新字体に改めた。

※引用文中の傍線部は引用者による。

（甲南中・高等学校講師）